



救急法研修で見た次の一歩

“Everyone has a first step”

12月8日から12日までの5日間、首都ポートモレスビーで救急法指導者研修が行われました。パプアニューギニア各地の州からボランティア9名が集まり、パプアニューギニア赤十字社の職員1名も参加しました！

主任講師はパプアニューギニア赤十字社救急法指導員のデズモンドさん。今回の研修は、デズモンドさんにとって、救急法上級指導者としての最終評価も兼ねた機会でした。共同講師として、オーストラリア赤十字社で救急法の指導に長く携わり、すでに救急法上級指導者資格を持つデビーさんが参加し、進行だけでなく、講師としてのふり返りも一緒に行っていました。

私は、国際赤十字・赤新月社連盟（以下、IFRC）の事務担当サリーさんと一緒に、研修の準備、当日の進行サポート、参加者のみなさんのフォローを担当しました。



デズモンドさん



デビーさん

REPORT

準備と「裏側」の仕事



研修に向けて、会場や航空券、共同講師の宿泊先の手配を進め、やるべきことは一覧にして進捗を確認しました。備品も見積もりを見直し、必要なものに絞って整えました。特に緊張したのは参加者のフライトで、予約便が二度キャンセルになり、旅行代理店と連絡を取りながら調整を続けました。それでも最終的には全員が前日までに到着し、大きなトラブルなく合流できました。研修中も会場準備や進行確認、参加者フォローなど運営を支え、研修はこうした見えない工程の積み重ねで成り立つのだと実感しました。

研修の内容

研修は、自己紹介とオリエンテーションから始まり、それぞれ5日間の目標を共有しました。あわせて、赤十字の基本原則やパプアニューギニア赤十字社の役割を整理し、「なぜ私たちが救急法を教えるのか」を改めて確認していました。

そして中盤は模擬授業をつくって実演し、互いにフィードバックを行いました。準備時間が足りずに慌てる人や、緊張して声が小さくなる人もいましたが、終了後に仲間の言葉に耳を傾ける姿が印象的でした。質問の投げかけ方や説明の工夫、安全確認など、教える側として考えるポイントを一つずつ確認する時間になっていました。

終盤は、コース運営全体に焦点が当てられていました。救急法の手技をどの基準で確認するか、受講者への声かけや安全確保をどう確かめるか一つずつ整理しながら、実際のコースを想定した練習を行いました。最終日には、それぞれが自分の言葉で進めようとする空気がありました。



オリナさんは、東ニューブリテン州の農村部で働く看護師です。2008年に看護師として働き始め、17年の経験があります。HIVカウンセラーとしての活動にも関わり、栄養プログラムや献血推進にも携わってきました。救急法に関心を持った背景を聞くと、「人を助けたい気持ちは、いつも根底にある」と話してくれました。また幼い頃、祖父の助言で医師を目指したこと、身近な家族の病気や別れが進路に影響したことなども教えてくれました。また、オリナさんの娘・ベンザリーナさんは現在14歳で、パプアニューギニアで最年少の赤十字ボランティアかつ救急員です。赤十字ボランティアとしての活動には、どこへ行くにもお母さんについて来るそうで、娘さんから「ママが私のお手本だよ！」と言われたことがある、と少し照れながら話していました。



ボランティアメンバーと



地域で救急法を実演するオリナさん



ベンザリーナさん

ピーターさん：現場で動く人を、地域で増やしていく

ピーターさんは、看護師として25年の経験があり、そのうち10年は赤十字国際委員会（以下、ICRC）の活動にも関わってきました。これまで救急外来の管理者を務めたほか、現在は公衆衛生領域の施設マネジメントにも携わり、現場の運営を支えています。ICRCでの経験については、保健要員アシスタントとして、計画づくりや若手スタッフのサポート、講習の調整など、幅広い実務を支えてきたと話してくれました。「これからも学び続けながら、地域で救急法を広げたい」と話され、その言葉の通り、模擬授業では落ち着いた説明で、相手の表情をよく見て進める姿が印象に残りました。



模擬講義をするピーターさん



おわりに

5日間を通して、参加者のみなさんは「自分ができるようになること」だけでなく、「周りの人にどう伝えていくか」を何度も話し合っていました。その姿から、伝える側に立つために必要な視点をたくさんもらいました。今回、残念ながら合格に届かなかった参加者もいました。修了式でピンバッジを手渡す場面で、IFRCパプアニューギニア国事務所の五十嵐真希所長はその参加者の手をそっと握り、声をかけました。

“Everyone has a first step.”

合否を問う言葉ではなく、次の一步を信じるメッセージとして、私の心にも深く残りました。

私自身もこの言葉を忘れずに、迷ったときほど“次の一步”を大切にしながら、現地の皆さんと一緒に取り組みを積み重ねていきたいと思ひます。

そして参加者のみなさんが各地に戻ってからも、今回の学びが“次の一步”となり、救急法が地域で活かされていくことを願っています🌱

